

AR
CA
DIA

76
AUTUMN 2018

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



岡崎市美術博物館

眼の極楽② 花と鳥のかたち

館長 榊原悟

虫めづる

一体、虫と云えば、日本人の虫との接し方、あるいは虫に寄せる感情には、他の国の人とくらべ、種独特のものがあつた。それを痛感せしめるのが、鳴く虫との係わりである。とりわけ秋に集く虫たちの声に対する思い入れが深い。

そうした鳴く虫への関心は、早くも『万葉集』に蟋蟀せむしの声に寄せる歌を遺してくれていた。

庭草に村雨ふりて蟋蟀の

鳴く声聞けば秋づきにけり(巻二〇)

そのうちの一首で、すでに蟋蟀の音が秋の到来を告げ、その景趣を構成するものとなつてゐることを見逃してはなるまい。とは云え、それら『万葉集』の蟋蟀歌には、なお後の時代の虫の声を詠んだ歌に見るような「悲しい」とか「わびしい」とかいった感情を伴なつていない。

そうした情を込めた歌が現れるのは、『古今和歌集』の時代を俟たねばならなかつた。しかもこれ以後、虫の声を詠んだ歌の数はいづきに増し、詠まれた虫も蟋蟀(当時「きりぎりす」と呼んでいたか)に限らず、鈴虫や松虫など、その種類も増えたと云う(以上、笠井昌昭著『虫と日本文化』シリーズ日本を知る 大巧社 一九九七年)。

虫の音きけばまづぞ悲しき 読人しらず

『古今和歌集』からの一首だが、「読人しらず」であるだけに、すでに悲しみの感情と虫の音とが、ごく普通に分かち難く結びついていたことが分かるだろう。『源氏物語』で桐壺更衣を失つた帝が亡き更衣をしのび、悲しみに沈む契機となつたのが、

風の音、虫の音につけて、もののみ悲しう思さるるに(桐壺)

と、風の音、虫の音であつたのも、それを物語る。

だが虫の音が呼びさすのは、悲しみに限るわけではない。しみじみとした秋の情緒や、さらに広くものあはれではなかつただろうか。またそうであればこそ、王朝人の

ESSAY

秋の虫に寄せる思いは一人であつたのだ。

こんな歌も遺してくれた(『拾遺和歌集』)。

前栽に鈴虫を放ち待りて

いづこにも草の枕を鈴虫は

ここを旅ともおもはさらなむ

鈴虫(現在の「松虫」のこと、現在の鈴虫は当時「松虫」と呼んだ)の気持ちに伊勢の歌だが、その鈴虫は、詞書にある通り、なんと人の手で採取され、庭に放たれたものであつたと云う。同種のエピソードが『源氏物語』鈴虫の帖にも「遙けき野辺」に分け入り採取したと説かれていることから、どのように捕えたか、虫捕り網があつたのか否か、それ自体興味ある問題だが、ともあれ虫捕りそのものはすでに広く行われていたことが分かる。しかも捕つた虫は庭に放つだけでない。虫籠に入れ、朝露まで吸わせている(『源氏物語』野分)。わたしも子供のころ、虫籠の虫に夜露を当てたものだ。まさしく飼育である。となれば虫たちは屋内にまで持ち込まれ、その鳴く音を愉しんだと云うのだろう(図1 京都国立博物館蔵)。王朝人の鳴く虫愛好はやはり一方ならぬ。

もう一首、かつて一度言及したことがあるが(榊原悟「長恨歌絵について」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』桐壺① 至文堂 一九九八年)、興味尽きない歌であるので、上げておこう。

ふるさとはあさちが原とあはれてて

夜すがら虫のねをのみぞなく

草深く荒れ果てた庭に鳴く虫の音を聞いて、懐旧の情を深める。『後拾遺和歌集』に収められた道明法師(九七四〜一〇二〇)の歌である。この歌のように浅茅(茅萱)の生い茂るのを見て、来し方をしのぶことは、

長き夜をひとり明し、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ色好むとは

いはぬ

と述べた『徒然草』(二三七段)の例を上げるまでもなく、わたしたちの先祖の、ごく自

然な心の動きであったようだ。その意味で極めて日本的な心情に根ざした一首と見てよいだろう。

ところが面白いことに、この歌は題詠であったようで、その詞書には、

長恨歌の絵に、玄宗もとの所にかへりて、虫ども鳴き、草も枯れわたりて、帝嘆き給へるかたある所をよめる

とある。つまり歌は屏風に描かれた絵を詠んだ、いわゆる屏風歌であったと云うのだ。その絵は白楽天の『長恨歌』の、

歸來池苑皆依旧 太液芙蓉未央柳

芙蓉如面柳如眉 对此如何付淚垂

春風桃李花開日 秋雨梧桐葉落時

西宮南内多秋草 落葉滿階紅不掃

という詩句、とりわけ末尾の対句に対応する情景が、絵画化されたとみてよいだろう。すなわち安祿山の乱で、一旦、蜀に落ちた玄宗が、再び長安城に戻り、いまは亡き最愛の女をしのんで、宮殿の庭を眺める場面である。その庭には落葉が降り敷き、秋草が生い茂る。

見逃してならないのは、その『長恨歌』では全く触れることのなかった虫が、道命法師の歌では、むしろ楊貴妃を失った玄宗の悲しみを痛切なものとするために、一種の核的景物となっている点である。しかし、それもこれも、わたしたちの先祖が、すでに見たように秋に集く虫の音に悲しみやものあはれの感情をかきたてられたからに他なるまい。実際『源氏物語』桐壺でも、桐壺帝の命をうけ、亡き更衣の母君のもとを訪れた靱負命婦が、母君と交わした歌に、

鈴虫のこゑのかぎりを尽くしても

ながき夜あかすふるなみだかな

とある。虫の音に寄せる王朝人の気持ちは格別であった。

むろん道命法師が詠んだ屏風絵にも、その詞書が云うように「むしども鳴く」さまが描かれていたに違いない。中国由来のテーマを描く唐絵に、王朝人好みのモチーフを持ち込む—この「長恨歌絵」は、まさしく和絵成立の秘密を教えてくださいるのである。しかも知らない。

ESSAY

そうした興味ある作だが、その屏風絵は、現在に伝わらなかつた。だが、それを彷彿とさせるものがある。道明法師の時代から、さらに百年余り後の作だ。和絵を代表する一点である。『源氏物語絵巻』鈴虫(一)である(図2)。五島美術館蔵。剥落がひどく、同じ鈴虫では(二)のほうが図版掲載される頻度が高いが、ここではむしろ剥落が幸いした。その顔料の落ちた下から、おそらくは彩色の指示とみられる文字が現れたのである。「にわ(庭)」、「せさい(前栽)」、「すすむし(鈴虫)」とある。その場面は、源氏が女三の宮を慰めようと、野辺で採集させた虫たちを、あたかも野原のように造りかえた前栽に放つ—鈴虫の帖の最も印象深いエピソードである。伊勢の歌が詠んだのも、まさしくこれである。そのシーンに確かに鈴虫が描かれていたのだ。

それから六百年後、住吉具慶(六〇―一七)の『源氏物語絵巻』(ミホミュージアム蔵)の鈴虫にも同種のシーンがあるの

で掲げておく(図3)。薄の葉末で鳴く鈴虫が確かに描かれている。王朝人の花園(前栽)には、鳴く虫こそが相応しい。しかも、彼らはその声を、なんと聞き分けてさえたのだ。

- ・秋風にこゑよわりゆく鈴虫の
つひにはいかながならむとすらん 大江匡衡
- ・さりともとおもふ心も虫のねも
よわり果てぬる秋の暮かな 藤原俊成
- ・夜をかさね声よわりゆく虫の音に
秋の暮れぬるほどを知るかな 大炊御門公能

わたし自身の「内なる王朝人」も、今この原稿を書きながら聞く蟋蟀のかぼそい声に、秋の終りをしみじみと感じ入っている。



図3



図2



図1

平成三十年は明治維新から一五〇年ということで、各地で様々なイベントが行われています。本展もその流れにちやっかかり乗っかって開催します。この展覧会では、明治期の博覧会を通して三河の近代化の歴史を見ていきます。しかしなぜ博覧会？と疑問に思われるかとも思います。その疑問に答えるには、これまで行った博覧会を思い浮かべていただけたら良いかもしれません。博覧会は出品者の最高の技術や独自の品をお披露目する場であり、また時に賞を得るために競い合う場でもあります。そしてそうした博覧会の特徴は、明治時代も同じでした。ですので、明治時代に行われた博覧会の出品物を見ていけば、当時の三河を代表する産品を知ることができ、明治十年・二十年・三十年…の博覧会を追っていけば、自ずとその変化を見ていくことができますと考えられるのです。つまり博覧会ほど地域の近代化を見ていくのいうってつけないテーマはないと言っても過言ではないのです！多分。

さて、予めお断りしておきますと、明治の博覧会をテーマとしています

が、この展覧会には「超絶技巧」の作品は登場しません。本展に並ぶのは、三河木綿にガラ紡、生糸や三州瓦、そして八丁味噌など。七宝焼や有田焼などと比べると、決して華々しさはありませんが、激動の明治という時代に懸命に立ち向かった人々の力を感じさせる展示品が揃っています。明治時代の近代化と聞くと、西洋の技術を取り入れて急激に変化したイメージがあるかもしれませんが。しかし博覧会出品物を見る限り、三河では江戸時代から続く伝統的な産業が受け継がれ、新たな技術も取り入れながら徐々に発展したと言う方が正しいようです。そうした特徴は、まさしく堅実・忍耐強いと評されることの多い三河の地域性を示しているように思います。

また逆説的ですが、三河という地域に限定して観察することで、かえって日本全体の近代化の歴史が浮き彫りにもなつたように感じています。例えば明治の日本の主要産業は、木綿から生糸へという大まかな流れに括られます。これを三河に限ると、明治十三年に官営模範工場として愛知紡績が岡崎に置かれます。

EXHIBITION

また明治十年第一回内国勸業博覧会で、鳳紋褒賞を受賞した臥雲辰致のガラ紡は、三河の紡績業の発展を支え、西洋式紡績が席卷していく中でも独自の展開をみせています。一方明治の後期には三河にも製糸業が発展していきます。岡崎の三龍社の生糸はパリ万博で受賞し、東三河では玉糸による製糸が営まれ一大産地となつていきました。本展では臥雲辰致が受賞した鳳紋褒賞のメダルや、大正天皇(当時は皇太子)が三龍社に行啓した際の御座所の再現などの象徴的な資料を通して、三河の近代化の特徴を紹介していきます。

帝国主義の世界に投げ出され、必然的に変わることが求められた明治の日本。その変化に三河の人々も懸命に対応し、時に抗つて生活を守る営みを続けてきました。本展ではそうした人々を「挑戦者」と捉え紹介していくことで、明治という時代を考えていきます。そしてこの展示を通して、明治維新から一五〇年、そして平成最後の一年となる今年、改めて見つめる機会となつてくれればと考えています。

明治150年

近代日本の挑戦者たち

—博覧会にみる明治の三河

湯谷翔悟



カクキュー八丁噌引札(カクキュー八丁味噌)

会期：平成30年9月29日(土)～11月11日(日)

収蔵品展

美博びっくり箱

—集める・伝える・これからも

内藤高玲



フランソワ・ペリエ《聖家族の船出》17世紀

岡崎市美術館では、収蔵品展「美博びっくり箱—集める・伝える・これからも」を開催します。

当館は開館以来、「マインドスケープ（心象風景）」を基本コンセプトに、「家康の生きた時代」「バロック美術」「東西文化の比較・交流」などに関する美術品・博物資料を収集するとともに、広く岡崎市域の歴史や文化、芸術に関する作品・資料を購入入などにより受け入れて、収蔵品の充実を図り、展覧会で皆様にご覧いただけてきました。

時代は原始時代から現代まで、地域はヨーロッパから日本を含むアジアまで、美術品から博物資料全般という幅広くバラエティーに富んだ収蔵品は、まさに美術館という名称を冠する当館にふさわしいコレクションを形づくってきました。

それらは素晴らしいコレクションであることは間違いないのですが、すべてを一度に展示することもなかなか難しいことです。今回の展覧会の名称を決める時に思いついたイメージは収蔵品展ならば収蔵庫、ならばその中は何であろう？ということでした。収蔵庫の中には多くの作

EXHIBITION

品や資料が厳重な管理の下で収蔵保管されていますが、収蔵庫に入った時に、私たち学芸員も「おや？こんなものもあったのか。」と思うことも多くあります。収蔵されているということは知っていても、専門分野が異なっていたりすると、あまりモノのイメージが湧いてこないというのが本当のところなんです。従って、学芸員にとっても収蔵庫は「宝箱」であることはもちろんですが、同時にいつも新鮮な驚きを与えてくれる「びっくり箱」であると言えます。そのため、当館の学芸員で話し合い、「びっくり箱」という名称が決まりました。サブタイトルは当館の使命である作品や資料を「集める」こと、そしてそれらを未来へと「伝える」として示す「これからも」を入れられました。

では、その「びっくり箱」を来館者の方に知っていただくためにはどうしたら良いのか？それも会議で話し合い、「びっくり箱」らしく、特に専門分野が異なる学芸員が今まで収集してきた各種の収蔵品の中からそれぞれ関心や興味のあるテーマを

決め、こだわりの逸品を展示し、当館コレクションの多彩な魅力をご紹介しますこととしました。

担当する学芸員は館長以下七名です。今回の展覧会は七つのテーマで構成されますが、それぞれの学芸員が今まで温めてきた切り口で収蔵品をご紹介します。

章立ては第一章から「キリスト教美術」、第二章「祈りの造形」、第三章「出土品でたどる岡崎の歴史と交流」、第四章「岡崎城絵図」、第五章「浮世絵が描いた矢矧橋」、第六章「蔵出し！美博秘蔵？の古文書たち」、第七章「志賀重昂と日露戦争」という豪華なものとなっております。

展覧会の会期がちょうどお歳暮、クリスマスプレゼント、お年玉といった贈り物の多い時期となりますが、当館からの贈り物である「美博びっくり箱」を開けてみていただけたらと思います。皆様のご来館をお待ちしております。

会期：平成30年11月24日(土)～平成31年1月14日(月・祝)

特別企画展「名刀は語る」の取り組み

浦野加穂子

特別企画展「名刀は語る」(六月二日〜七月十六日開催)は、目標を越える多くの皆様にご来館頂きました。要因としては、日本有数の刀剣コレクションを誇る佐野美術館の協力を得て、展示内容が充実していたこと、岡崎ゆかりの武将本多忠勝の愛槍「大笹穂槍(号 蜻蛉切)」の特別出品に合わせて、本多家の名宝と三河の刀工の名品を紹介する岡崎独自の展示を企画したこと、特に「蜻蛉切」と忠勝所用の「黒糸威胴丸具足」が会するのは岡崎では約三〇年ぶりの貴重な機会であったこと等が挙げられますが、加えて広報やイベントなどで当館初のような試みを行いました。

【「刀剣乱舞」、「葵武将隊」とのコラボレーション企画】
「蜻蛉切」の特別出品を記念して、PCブラウザ&スマホ向けゲーム「刀剣乱舞ONLINE」とのコラボ企画として、刀剣男士「蜻蛉切」等身大パネルの展示(記念撮影可)と、特設ショップにて関連グッズを販売しました。またグレート家康公「葵」武将隊による演武披露と武将隊と巡る展示説明会を企画しました。近年の

「刀剣」や「歴女」ブームを受け、幅広い層の方々に本展にお越し頂くきっかけとなりました。

【SNSの活用】

近年のSNSの広がりを重視して、Web広報に注力しました。当館のHPやFacebookに加え、広報課やシテイプロモーション、観光協会などのSNSで展覧会情報を頻りに発信するとともに、展示室に撮影可能な箇所(徳川將軍家伝来刀コーナー、蜻蛉切コーナー)を設け、展覧会内容のSNS拡散に努めました。

【岡崎市内刀剣巡り】

同時開催の三河武士のやかた家康館企画展「美しき日本刀〜三河地方の刀剣を中心に〜」と観覧チケット半券提示による観覧料相互割引を実施し、相乗効果がありました。



刀剣男士「蜻蛉切」等身大パネルの設置風景

EXHIBITION

企画展「ジョルジュ・ブラック―宝飾デザインの輝き」イベント後記

高見翔子

企画展「ジョルジュ・ブラック―宝飾デザインの輝き」(七月二十八日〜九月十七日開催)では、展覧会関連イベントとして、講演会とワークショップを行いました。

【講演会】七月二十九日(日)

「芸術における規則と感情―ジョルジュ・ブラックにおけるキュビズムから古典主義への変容」
講師：松井裕美氏(名古屋大学高等研究院 日本文学研究科特任助教)

演題である「芸術における規則と感情」は、一九一七年にブラックが残した言葉から引用されていました。講演会では、ブラックの制作に関する解説と併せて、当時の社会背景と同時代の作家たちの制作やその動向についてもお話いただきました。本展出品作品の主題となつている神話のモチーフとその造形、ブラックの作品との影響関係について、紀元前八世紀のエトルリア文化を意識していた点も触れられていました。特に興味深かった内容は、第二次大戦後のブラックと装飾芸術について、一九三〇年代当時の社会背景に、近代的な装飾を教会の中に採り入れていこうとする動きがあり、またブラックだけ

ではなく、ピカソ、マティス、シャガールなど、同時代の芸術家たちが装飾や工芸といった分野にも制作の幅を広げていったというお話でした。

【ワークショップ】「真鍮のプローチづくりにチャレンジ」

子供向け：八月十六日(木)
一般向け：九月八日(土)

講師：金沢みのり氏(オフィスマツクモウル)
ブラックがデザインを手掛けたジュエリーの一部には、金属板を叩いて形を造り上げていく「鍛金」という技法が見られます。今回はこの技法を用いて、ブラック作品に登場するモチーフの型紙を使い、プローチづくりを行いました。一時間ほど真鍮板を叩き続ける工程は、大人でもとても根気のいる作業でしたが、最後には皆さん素敵なプローチを完成させていました。



完成したプローチ

平成30年度博物館実習

当館では、学芸員資格の取得をめざす学生に向けた博物館実習を毎年、夏季期間に行っています。

今年度は、八月二十一日(火)から二十五日(土)までの五日間で実施し、愛知県立大学、愛知教育大学、愛知淑徳大学、愛知学院大学、名古屋学芸大学、名古屋芸術大学、中部大学より各二名、全七名の大学生が参加しました。県外からの実習生も含め、毎日、一時間に二本のバスに乗って通っていただき、途中は台風の通過もありましたが、皆さん無事に全課程を修了しました。

博物館実習は、実際に博物館の現場で学芸員をはじめとする館職員の仕事を学ぶまたとない機会であるため、当館では実践に重点を置いた内容となっています。

実習の課程は、まず館のガイダンスから始まります。収蔵庫や空調管理設備など迷路のような舞台裏をめぐり、施設管理や館全体の運営について紹介します。

次に、担当の学芸員が入れ替わりながら美術、歴史、民俗、考古の各資料の収集・保存から取り扱い

について、自らの経験を交えながら説明を行います。直接手に取る前に行う資料の状態確認の仕方を実践し、収蔵品を例に、資料の小さな破れやヒビまでも観察します。そしていよいよ、実際に資料に触れて扱ってもらいます。巻子の巻き方、民俗資料の計測など、皆さんよく資料を観ながら丁寧に取り扱い扱っていました。

今回は丁度この時期に重なった、資料をカビや虫害から守る燻蒸の様子も実見してもらえました。燻蒸庫に新収蔵や借用した品が積み込まれた前で、専門業者の担当者の方から燻蒸の方法を聞き、効果判定用のココゾウムシ、クロウジカビのテストサンプルを設置するところを見学しました。

他にも、展覧会の企画から実施までの直接展示に関わることから、講座やワークショップなどの教育普及と、ポスター・ちらしの制作・発送をはじめSNSによる発信などの広報活動も講義に含まれています。実習後半には図書の整理も体験してもらいました。活用しやすいように分類して配架する

COLUMN & TOPIC

作業を、グループ内で自発的に役割分担しながら、チームワークよく進めていました。

また、市内の世界子ども美術博物館、美術館からもベテランの学芸員が、各館の特色や活動を紹介します。

こうして五日間で博物館の仕事全般と岡崎市の全体の状況を博物館の抱える課題なども含めてひととおり知ってもらいました。

内容の積まった日程と実習ノートの内容の作成で、実習生の皆さんは忙しかつたと思いますが、休憩時間にも、通路に並ぶ展示台を見ていたり、開催中のジョルジュ・ブラック展を鑑賞したりと熱心に取り組んでいました。

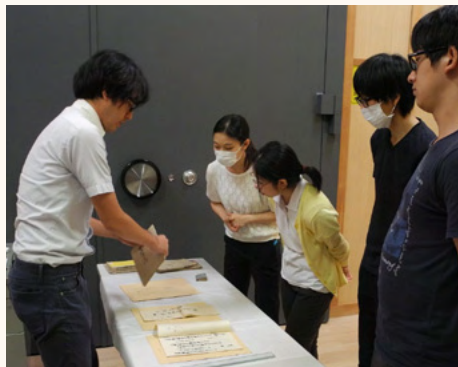
今回の実習生の専攻分野は様々で、美術、歴史学、考古学、造形文化、メディアプロデュース、ファッション造形と多岐にわたりましたが、当館が美術も博物館も取り扱っているからこそ幅広く受け入れられ、そして実習時間を共有することでそれぞれの専門以外の輪が広がったと思います。これからの経験を活かしていただけると幸いです。

です。当館にとっても若い世代の皆さんから、直接意見を聞ける貴重な機会となりました。

小幡早苗



館内での講義風景



歴史資料の取扱い

INFORMATION

■平成30年度企画展

明治150年 近代日本の挑戦者たち 一博覧会にみる明治の三河

9月29日(土)～11月11日(日)

□講演会(当館1階セミナールームにて)

日時:10月7日(日)午後2時～

「博覧会にみる明治の日本」

講師:國雄行氏(首都大学東京教授)

□経営者にきく明治150年(当館1階セミナールームにて)

日時:10月20日(土)午後2時～

①「八丁味噌のこれまでとこれから」

講師:浅井信太郎氏(まるや八丁味噌代表取締役社長)

早川久右衛門氏(カクキュー八丁味噌代表・八丁味噌協同組合理事長)

日時:11月4日(日)午後2時～

②「服部工業―御用鋳物師から服部グループへ」

講師:服部良男氏(服部グループ代表)

□作家トーク(当館1階セミナールームにて)

日時:10月28日(日)午後2時～

講師:柄澤照文氏

□展示説明会(当館1階展示室にて)

日時:10月6日(土)、10月18日(木)、11月3日(土・祝)、11月11日(日)

いずれも午後2時～

□八丁味噌の日

日時:10月8日(月・祝)、10月18日(木)、10月28日(日)、11月8日(木)

展覧会開催中8の付く日は「八丁味噌の日」とし、各日入場者の先着5組様に、当館1F受付にてまるや八丁味噌・カクキュー八丁味噌の商品詰め合わせをプレゼントします。

□パンマルシェ

日時:10月18日(木) 午前10時～午後3時(売り切れ次第終了)

場所:当館前 風の道(晴天時)

総合体育館エントランスホール(雨天時)

明治期の博覧会では会場前に出店が並び、博覧会を盛り上げていました。それにちなんで岡崎市内の人気のパン屋を中心に約20店舗が出店し、「パンマルシェ in 中総」を開催します。

えっ!! なぜここにあるの?

なぜ高浜市にこのような資料があるのだろうか。思わず首をかしげてしまった。

最近地元『高浜市誌』を手にして読んでみた。恥かしながら市誌の存在は知っていたが、今までじっくりと読んだことはなかった。あらためて目を通してみると、なんと幕末の福井藩主松平春嶽が高浜市の狂俳の宗匠一儷舎に揮毫した扁額があることが記されていた。その記述を目にしたときは、衝撃的であった。まさか高浜市に春嶽が揮毫した扁額があるとは…。

そして、つい先日その扁額をお世話になった先生とともに一儷舎のご子孫の方から見せて頂ける機会があった。扁額には「一儷舎 春嶽」とあった。やはり本物は違う。その迫力に圧倒される。特に扁額の「春嶽」という名前を目にした時は興奮とともに、何とも言えない感情がこみあげてきた。

しかし、「なぜ高浜の狂俳の宗匠が福井藩主の松平春嶽から揮毫してもらったのだろうか」、「松平春嶽と一儷舎はどういった関係であったのか」疑問が湧いてくる。これらの疑問を説明しなければならぬ。

今まで高浜市と松平春嶽が結びつくとは思っていなかった。只々驚きの一点でしかない。灯台下暗しである。(柴)

おしゃべり、あれこれ。

一途な思いは、いつかきつと花開く

昨年十一月、私の「夢」が叶いました。

滞独していた時の、苦業を共にした友との二十年ぶりの再会です。そしてこの再会は、彼女の強い思いがあったからこそ叶ったのだと信じています。

七年前の東北大地震は、世界中を震撼させた大惨事でした。疎遠になりつつあった私達でしたが、彼女は私の安否を心配して、SNSを駆使して私を探し続けてくれました。小さな島国日本全土が震災、原発事故に見舞われてしまったかのように、感じられました。東洋、特に日本にとっても興味を持って読んでいた彼女、そして息子さんの日本への留学。彼に会うための来日でしたが、私達はそれまでの会えなかった時間を取り戻すかのように、語り合い、笑い合い、泣きまくりました。彼女が私に言いました。「私達きつと会えると思っていました。」でも私は「私達もう二度と会えない……。」と、思ってしまった。過ぎてきました。彼女の思いを知り、私はどれ程自分を恥ずかしく感じたことでしょうか。

今私の机には、彼女にもらったドイツ・バイエルン州のカレンダーがあります。かの地で彼女と再び時を刻むことができるのを、信じている私がいま。彼女が別れ際に囁きました。「もう私達、二十年も待たないわよね……。」(林)

編集後記 | 平成30年(2018)は、明治元年(1868)から満150年の年に当たり、全国各地で明治期を振り返り、将来につなげる事業が行われています。

岡崎市では、9月29日から開催の「近代日本の挑戦者たち―博覧会にみる明治の三河」で、世の状況や常識がめまぐるしく変わる新しい時代に、現在の「モノづくりの地」の下地を生み出していった人々の取組をご覧ください。八丁味噌の日、パンマルシェなどイベントも盛りだくさんです。(小幡)

表紙図版:金欄手立葵紋天目茶碗(個人蔵)



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第76号 2018年10月発行

編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1-1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

ARCADIA